

ODIP v3.4 リリースノート

2018/11/30

(株) インテリジェント・モデル

ODIP は、(株) インテリジェント・モデル社の登録商標です。

本書に掲載された情報に基づいた行為の結果として発生した損害、利益の損失、経費などについて、(株) インテリジェント・モデルならびに本書の製作関係者は一切の責任を負いません。

本書は著作権法上の保護を受けています。本書の一部あるいは全部を無断で転載・複製することは法律で定められた場合を除き、禁止されています。

目次

A. 変更内容	5
1. 処理実行中のトランスフォーマ・リポジトリのリリース対応	5
(1) 改定内容	5
(2) オプションの変更	5
(3) 留意点	6
(4) 改定の影響範囲	7
2. プロセス番号の廃止	7
(1) ODIP アドミニストレータ	7
(2) ODIP プロセスマネージャ	8
(3) ODIP オペレーションマネージャ	8
(4) ODIP トランスフォーマ	9
(5) 改定の影響範囲	9
3. ODIP アドミニストレータの操作性改善	9
(1) 改定内容	9
(2) 改定の影響範囲	17
4. ODIP プロセスマネージャの操作性改善	17
(1) 改定内容	17
(2) 改定の影響範囲	17
5. ODIP リポジトリマネージャの操作性改善	18
(1) 改定内容	18
(2) 改定の影響範囲	18
6. ODIP オペレーションマネージャの操作性改善	18
(1) 改定内容	18
(2) 改定の影響範囲	18
7. ODIP トランスフォーマの改定	19
(1) 改定内容	19
(2) 改定の影響範囲	19
8. 不具合の修正	19
(1) ODIP アドミニストレータ	19
(2) ODIP オペレーションマネージャ	20
(3) ODIP トランスフォーマ	20
B. 旧バージョンからのバージョンアップ	22
1. バージョンアップ手順 (3.2.8 以降)	22
(1) トランスフォーマ・リポジトリのバックアップ	22

(2) 旧バージョンのライブラリファイルのバックアップ	22
(3) ライブラリファイルの更新	22
(4) トランスフォーマ・リポジトリの変換	23
(5) トランスフォーマ・リポジトリの生成	23
2. 旧バージョンへ戻す方法	23
(1) トランスフォーマ・リポジトリの削除	23
(2) バックアップしていたライブラリファイルの戻し	24
(3) トランスフォーマ・リポジトリの戻し	24
3. 変換が行われていないトランスフォーマ・リポジトリの上書き	24

A. 変更内容

1. 処理実行中のトランスフォーマ・リポジトリのリリース対応

(1) 改定内容

ODIP トランスフォーマによるバッチ処理実行中に、バッチ処理を停止することなくトランスフォーマ・リポジトリの変更をリリースする機能が追加されました。この機能は、ODIP トランスフォーマのオプションの変更によって有効になります。このオプションを有効にすると、次の操作で発生するトランスフォーマ・リポジトリへのアクセスに対する排他制御が行われ、一方の操作の進行中に他の操作が行われた場合、トランスフォーマ・リポジトリへのアクセスを相互に待ち合わせすることで、操作間の不整合が生じないように制御されます。ODIIP アドミニストレータから実行する場合には排他制御が行われず、タイミングによっては、実行中のバッチ処理は従来どおりエラーになることがあります。

- ・ ODIP プロセスマネージャからのトランスフォーマ・リポジトリの作成／更新
- ・ repimp コマンドまたは ODIP オペレーションマネージャによるトランスフォーマ・リポジトリのインポート
- ・ repedit コマンドまたは ODIP オペレーションマネージャによるデータソース情報編集
- ・ startjob コマンドまたは ODIP オペレーションマネージャによる処理の実行

(2) オプションの変更

① ODIP トランスフォーマの追加オプション

ODIP トランスフォーマの設定ファイル “batchMain.conf” に次のオプションが追加されました。本機能を有効にするには、設定ファイルの変更が必要です。

(a) 排他制御の有効化・無効化

オプション	repository_exclusive_control = [y n]
説明	ジョブの実行中にトランスフォーマ・リポジトリの更新をエラーなく行えるようにするかどうかを指定します。y にするとトランスフォーマ・リポジトリへのアクセスが排他的になり、ジョブ実行中であっても、repimp コマンド（またはオペレーションマネージャによるインポート）、repedit（またはオペレーションマネージャによるデータソース情報の編集）を正常に行うことができるようになります。
既定値	n
有効な DBMS	Oracle、DB2、SQL Server

(b) 最大待ち時間

オプション	repository_exclusive_lock_waittime=[秒数]
説明	このオプションは、repository_exclusive_control=y のときだけ有効です。 repimp コマンド（またはオペレーションマネージャによるインポート）、 repedit コマンド（またはオペレーションマネージャによるデータソース 情報の編集）によるトランスフォーマ・リポジトリのアクセス時に、ロック を獲得するまでの最大待ち時間を秒数で指定します。指定秒数を経過し てもロックが獲得できない場合、repimp 等の操作はエラーになります。
既定値	600（秒）
有効な DBMS	Oracle ※ DB2 はデータベースの構成パラメータ LOCKTIMEOUT に従います。 SQL Server は設定ファイル sqlserver2008.properties の Jdbc_Url に "lockTimeout=ミリ秒"を追加してください。

② ODIP プロセスマネージャの設定変更

本機能では、ODIP プロセスマネージャの設定ファイル“prcmng.voptions (64bit 版
の場合は prcmng_x64.voptions)”に次のパラメータが追加されました。パラメータの
内容は、上記 ODIP トランスフォーマ・サーバの設定ファイルに追加されたオプション
と同じです。ODIP プロセスマネージャからトランスフォーマ・リポジトリ作成を行う
際に、ODIP トランスフォーマ・サーバで実行中の処理との間で排他制御を行う場合
には、設定ファイルに次の行を追加してください。repository.exclusive.lock.waittime
による秒数の指定は任意で、指定しない場合は 600 秒（10 分）になります。

```
-Drepository.exclusive.control = true|false
-Drepository.exclusive.lock.waittime = 秒数
```

(3) 留意点

① LOCKMNGTBL の追加について

新たにトランスフォーマ・リポジトリのテーブルとして LOCKMNGTBL が追加されまし
た。LOCKMNGTBL はトランスフォーマ・リポジトリのエクスポート／インポートの対象
外です。そのため、エクスポートしても、tsv ファイルは作成されません。

② ロックが残る可能性について

本機能はトランスフォーマ・リポジトリへのアクセスが安全に行われるように

LOCKMNGTBL の表ロック、行ロックを利用します。そのため、ロック取得中のプロセスが SIGKILL によって強制終了された場合やクラッシュした場合、データベースによってはロックが残り、解放されるまで他のオペレーションが実行できない可能性があります。この対策として、例えば Oracle では、非アクティブなセッションの検知とロックの解放を早めるために、\$ORACLE_HOME/network/admin/sqlnet.ora のパラメータ SQLNET.EXPIRE_TIME に比較的短い時間を設定することを検討してください。緊急の場合は、LOCKMNGTBL へのロックを長時間取得しているセッションの強制終了をデータベース管理者に依頼してください。

(4) 改定の影響範囲

本改定では、ODIP プロセスマネージャ、ODIP オペレーションマネージャ、ODIP トランスフォーマにおける、トランスフォーマ・リポジトリの作成、インポート、参照、更新など、トランスフォーマ・リポジトリへのアクセスに関わる改定が行われました。また、ODIP トランスフォーマでは、バッチ処理エンジンの実行制御部分が改定されています。本改訂によって、既存定義の変更、実行結果の相違が生じることはありません。

尚、排他制御の有効化による既存処理への影響は次のとおりです。

- ・ プロセスマネージャからトランスフォーマ・リポジトリを作成したときに、既存プロセスの実行日、実行時間、状態などの運用情報は、消去されなくなります。このため、トランスフォーマ・リポジトリ作成後、ODIP オペレーションマネージャに表示される情報が旧バージョンの場合と異なります。
- ・ ロックの獲得待ちなどによるレイテンシが発生する可能性があります。

2. プロセス番号の廃止

トランスフォーマ・リポジトリの作成時に自動採番される連番の“プロセス番号” (6桁) が廃止され、“プロセス ID” (14桁) に統一されました。ODIP アドミニストレータ、ODIP プロセスマネージャ、ODIP オペレーションマネージャの画面、及び、バッチ処理のジョブログにおける、プロセス番号とプロセス ID の混在をなくし、プロセス ID でプロセスを一意に識別するように変更しました。合わせて、ジョブ番号も従来の 10桁から 18桁に拡張されました。プロセス ID に変更はありません。各製品の主な変更箇所は、次のとおりです。

(1) ODIP アドミニストレータ

[実行]ダイアログの「プロセス表示」ボタンで開くプロセス表示ダイアログ (図 1) のプロセス番号がプロセス ID に変更しました。また、プロセス内のジョブ一覧ウインドウでは、ジョブ番号は 18桁 (プロセス ID+4桁の連番) で表示されるようになりました。

プロセスID	管理単位	サイクル	ユーザビュートイプ	入力データ	先行プロセス	フォル...	フォ...	フォ...	サイ...	管理単...
01010200010100	売場別単品別_明細	日次	明細	売場別単品別入力	01	01	02	01	010	

ジョブ番号	タスクID	タスク名	タスクタイプ	タスクタイプ名	前ジョブ
010102000101000001	00	明細作成	010	明細作成/カテゴリ演算	010102000101000001

図 1 プロセス表示の例

(2) ODIP プロセスマネージャ

プロセス番号とプロセス ID の両方が表示されているビューから、プロセス番号が削除されました。プロセス番号だけが表示されているビューでは、プロセス番号に代えてプロセス ID が表示されるようになりました。図 2 は、プロセス一覧の例です。

定	プロセスID	管理単位	サイクル	クロス集計/明細	先頭	前
000001	01010100010101	店別_クロス集計	日次	クロス集計	<input type="checkbox"/>	0
000002	01010300010100	売場別単品別_明細	日次	明細	<input type="checkbox"/>	0

図 2 プロセス一覧の例

(3) ODIP オペレーションマネージャ

プロセス番号とプロセス ID の両方が表示されているビューから、プロセス番号が削除されました。プロセス番号だけが表示されているビューでは、プロセス番号に代えてプロセス ID が表示されるようになりました。図 3 は、プロセス管理画面の例です。

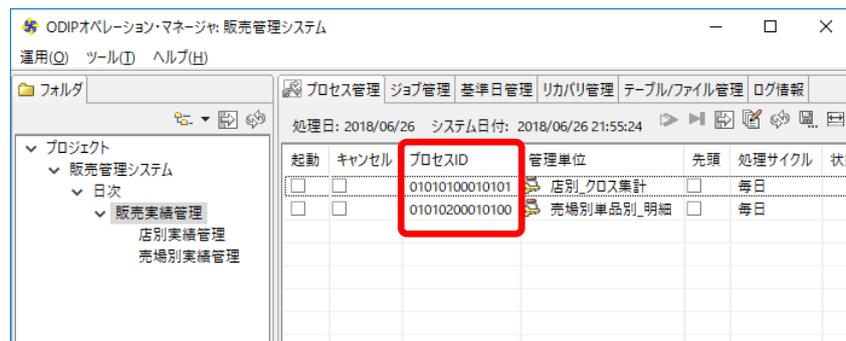


図 3 プロセス管理画面の例

(4) ODIP トランスフォーマ

odipjob.log の 3 項目に出力されていたプロセス番号が出力されなくなり、5 項目目のジョブ番号は 10 桁から 18 桁に変更されました。変更前と変更後のジョブログの出力例を図 4 に示します。

<ul style="list-style-type: none"> ・変更前 2017/06/21 13:47:00, user01, 000001, 01000000010100, 0000010001, I, ジョブ 開始, 運用管理サーバ, ジョブ管理, 20180621155908973 ・変更後 2017/06/21 13:47:00, user01, , 01000000010100, 010000000101000001, I, ジョブ 開始, 運用管理サーバ, ジョブ管理, 20180621155908973

図 4 ジョブログの出力例

(5) 改定の影響範囲

本改訂によってジョブ番号の体系が「6 桁連番+4 桁連番」から、「14 桁プロセス ID+4 桁連番」に変わります。トランスフォーマ・リポジトリのテーブル定義の変更に伴って、既存のトランスフォーマ・リポジトリの変換または再作成が必要になります。本リリースノートの「B 旧バージョンからのバージョンアップ」をご参照の上、必要な変更を行ってください。

startjob、stopjob の-job オプションを使用している場合は、新しい 18 桁のジョブ番号を指定するように変更してください。もしくは、-pi オプションを使用して、プロセス ID を指定することを検討ください。本改訂による既存定義の変更、実行結果への影響はありません。

3. ODIP アドミニストレータの操作性改善

(1) 改定内容

① コンポーネント名の既定値設定機能の追加

ODIP アドミニストレータの [ツールメニュー > プリファレンス] の [初期名称 > コンポーネント名] に、コンポーネント名の既定値の設定画面が追加されました (図 5)。管理単位を除くコンポーネントの種類ごとに、指定した名称が新規コンポーネントの名前入力ダイアログに自動的に設定されます。また、名称には%k (管理単位名)、%p (上位コンポーネント名)、%t (コンポーネントの種類) の各変数を使用できます。すべてのコンポーネント名の既定値を変更するには、「一括指定」ボタンで表示されるダイアログで設定してください。

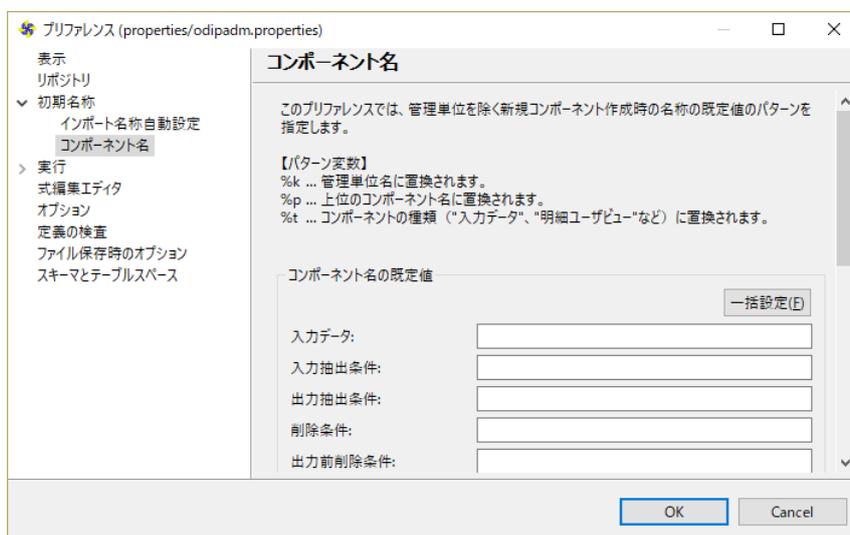


図 5 コンポーネント名の既定値の設定画面

例えば、出力抽出条件のコンポーネント名の既定値に「%p - %t (%k)」が指定されているとき、ユーザビュー「売場別単品別売上実績明細」に出力抽出条件を追加すると、「売場別単品別売上実績明細 - 出力抽出条件 (売場別単品別明細)」が既定の名前となります。(図 6)

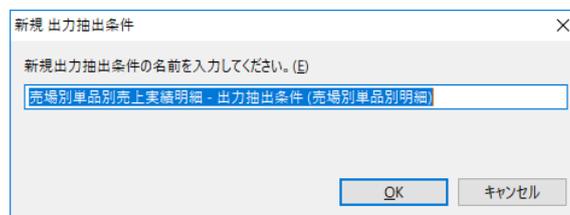


図 6 新規コンポーネント名の入力ダイアログ

既に存在しているコンポーネントの名称にも既定値のパターンを適用するには、フォ

ルダ・タブでフォルダまたはコンポーネントを選択し、「コンポーネント名の更新...」(図 7) を実行してください。選択した定義より下の階層のコンポーネント名が一括で既定値に変更されます。同じ種類のコンポーネントが既に存在し、名前が重複する場合は、2 つ目以降のコンポーネント名に自動的に_1、_2 のように番号が付与されます。中間入力データ (<Interim>定義) の名称はこの機能で更新されません。

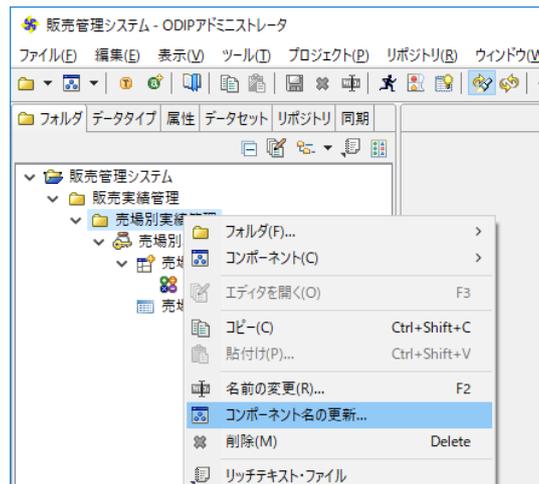


図 7 フォルダ・タブのコンテキストメニュー

② 導出演算式編集ダイアログの改定

導出演算、抽出条件、ユーザ関数の式編集ダイアログでは、演算子及び関数一覧表示部のサイズが変更できるようになりました。図 8 の境界部をドラッグし、左方に移動することで、サイズを変更することができます。

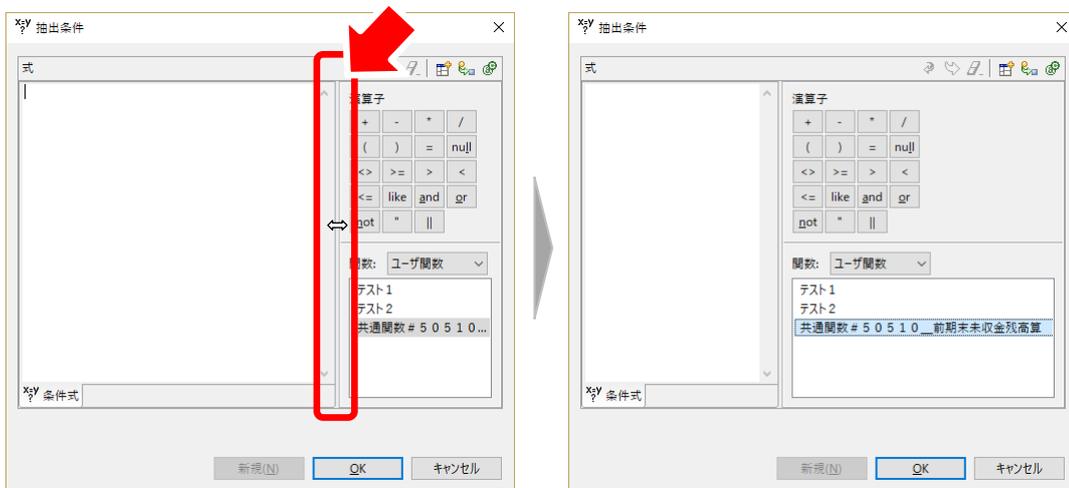


図 8 抽出条件の編集ダイアログ

③ 入力データセットの Join Group 移動

入力データ定義画面の“入力データセット”ツリー表示において、異なる Join Group 間でのデータセットの移動ができるようになりました。図 9 は、データセットを下位の Join Group へと移動する画面の例です。

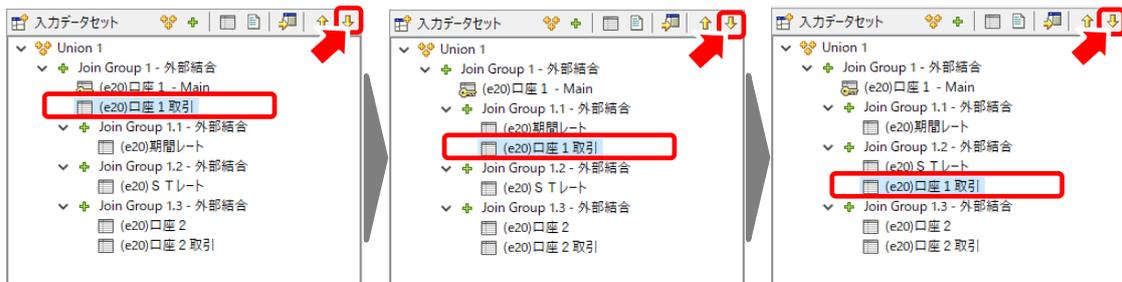


図 9 データセットを下位の Join Group へ移動する例

④ 明細ユーザビューの元属性をドラッグ&ドロップによって設定する機能の追加

明細ユーザビューの出力データセットタイプが、「データセットに合わせてユーザビューを更新」である場合に、従来の出力属性の編集ダイアログから元属性/設定値を指定する方法に加えて、元属性に選択可能な属性の一覧からドラッグ&ドロップによって元属性を設定するオプションが追加されました。図 10 に、元属性選択ダイアログの例を示します。元属性選択ダイアログの行をドラッグして、ユーザビューにドロップすることで、元属性が設定されます。

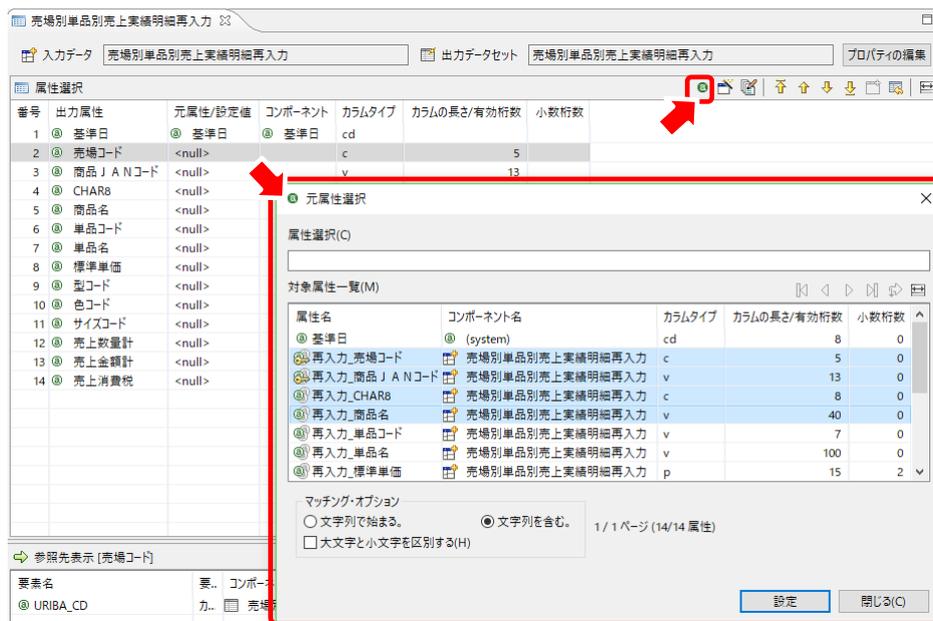


図 10 明細ユーザビューの元属性選択ダイアログの例

⑤ 導出演算のコピー・ペースト機能改定

ODIP アドミニストレータの編集メニューのコピー (Ctrl+Shift+C)、ペースト (Ctrl+Shift+V) によって、異なるタイプの導出演算定義 (入力時導出演算の各タブ、出力前導出演算、ユーザ関数) の間、及び異なる管理単位の導出演算定義の間で、コピー・ペーストを行えるようになりました。

⑥ エディタのタブを閉じるオプションの追加

エディタ画面のタブを右クリックして表示されるコンテキストメニューに、**図 11** のように、タブを閉じるためのオプションが追加されました。他のタブ、右側のタブ、左側のタブの基準となるタブは、右クリック時にポイントしたタブではなく、選択中のエディタのタブになります。

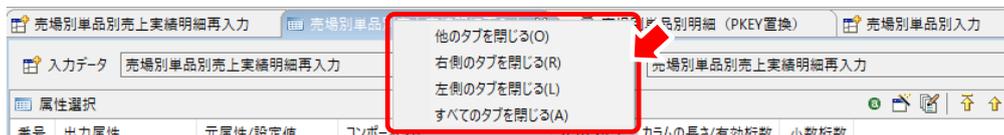


図 11 エディタ・タブのコンテキストメニュー表示例

⑦ ツリー・一覧とエディタの同期

(a) フォルダ・ツリーとエディタとの同期

プリファレンスの表示ページで、「エディタの選択時にフォルダ・ツリーのコンポーネントを選択する」を有効にした場合、フォルダ・タブまたはデータセット・タブ上のコンポーネントをシングルクリックまたはカーソル移動で、既に開いているエディタが表示されるようになりました。

(b) 導出演算・抽出条件の一覧と編集ダイアログとの同期

導出演算、抽出条件のビューアから編集ダイアログを開いた状態で、ビューア上の定義済をカーソル移動またはシングルクリックで選択した行の定義内容が、開いている編集ダイアログに表示されるようになりました。

⑧ 属性、データセットの検索機能改定

属性選択ダイアログで属性名を検索するときや、データセット選択画面でデータセットを検索するとき、カタカナ、英字、数字などの全角と半角を区別せずに検索が行われるようになりました。また、これらの検索ダイアログに“大文字と小文字を区別する”オプションが追加されました。

⑨ 入力データ、入力抽出条件、入力時導出演算を開いたときの表示変更

入力データ、入力抽出条件、入力時導出演算の定義画面を開いたときに、左方に表示される Union、Join Group、データセットのツリーを展開し、最初の Join Group にカーソルが置かれた状態で表示されるようになりました。図 12 は、入力抽出条件の変更前と変更後の表示例です。

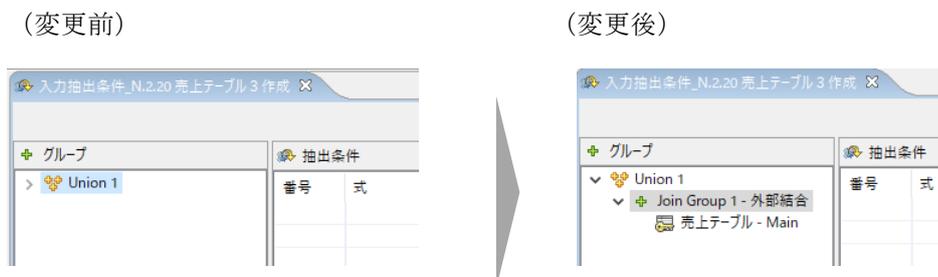


図 12 入力抽出条件の変更前と変更後の表示例

⑩ コンテキストメニューの新規・追加オプション追加

定義画面の右クリックで表示されるコンテキストメニューの操作性の統一を図るために、次の定義画面のコンテキストメニューに、次のオプションが追加されました。

- ・データセットのデータセット・インデックスウィンドウの“追加”オプション
- ・入力データの外部変数属性タブの“新規”オプション
- ・管理単位の管理単位データセットウィンドウの“データセット追加”オプション

⑪ 定義項目の移動アイコンの表示順の統一

各コンポーネントのコンテキストメニュー及びツールバーに表示される上下移動オプションの表示順が一部異なっている画面がありました。アイコン及びオプションが表 1 の順に表示されるように統一されました。

表 1 上下移動オプション・アイコンの表示順序

コンテキストメニューのオプション	ツールバーのアイコン
<ul style="list-style-type: none"> ・一番上に移動 ・上に移動 ・下に移動 ・一番下に移動 	

⑫ 定義編集ダイアログの OK ボタン押下後の動作改定

例えば、属性タブの属性編集ダイアログで、既存の定義内容を変更して OK ボタンを押したときに、以前のバージョンでは、ダイアログは閉じずに新規入力モードになりましたが、本バージョンでは、ダイアログを閉じるように動作が改定されました。同

じ改定が、他の定義の編集ダイアログにも適用されています。一方、データセットのカラム定義の編集ダイアログは、OK ボタンを押したときに、ダイアログは閉じずに、次の行に移動します。編集ダイアログはこれら二つのどちらかの動作を行います。表 2 に、OK ボタン押下時の動作と該当する定義を示します。

表 2 OK ボタン押下時の動作と該当する定義

OK ボタン押下時の動作	該当する定義
次の行に移動する	<ul style="list-style-type: none"> ・ データセットのカラム定義 ・ 休日テーブルの休日規則 ・ コード変換のカテゴリ変換ルール ・ ピボット変換の変換ルール ・ 明細ユーザビュー ・ クロス集計ユーザビューの列項目・行項目
ダイアログを閉じる	上記以外の定義

⑬ ツールバーのアイコン追加

ツールバーにプロジェクトファイルを開くアイコン (図 13) が追加されました。



図 13 ODIP アドミニストレータのツールバー

⑭ リポジトリタブの改定

(a) 画面の自動更新及び更新時の動作改定

チェックアウト、コミット、リリースの操作が行われた後に、リポジトリタブの画面がリポジトリの最新の状態に更新されるようになりました。また、これまでのバージョンでは、再表示オプションを用いて画面を更新すると、リポジトリタブで開いているツリーを閉じて、プロジェクトのルートノードだけが表示されていましたが、本改定によって、開いているツリーはそのままに、リポジトリの最新の状態に画面が更新されるようになりました。

(b) 表示オプションの追加

リポジトリタブのツールバーに、フォルダ、ユーザ関数を名前順にソートするアイコン (図 14) が追加されました。オプションを有効にすると、プロジェクト内のフォルダ名、ユーザ関数名などの要素は、名前順に表示されます。



図 14 リポジトリタブのツールバーのツールバー

⑮ データ名称インポート画面の表示改定

ファイルメニューの「データ名称インポート」において、インポートデータの確認画面の表示に次の変更が行われました。

- ・ 次のエラーまたは警告を検索する「Next error/warning」アイコンが削除されました。その代わりに、[Ctrl]+[e]キーによって「次のエラーを検索」、[Ctrl]+[w]キーによって「次のワーニングを検索」できるようになりました。
- ・ ビューアに、標準のソート及びフィルタオプションが追加されました。ヘッダ部をクリックすると、オプションが表示されます。
- ・ エラー/警告の表示列が追加されました。エラー、警告、削除の区分が、アイコンと共に表示されます。

⑯ メニューバーの機能改定

- (a) ツールメニューのリスト表示、全参照のダイアログの表示画面において、ヘッダをドラッグ&ドロップすることで列の順番を変更し、行をクリップボードにコピー&ペーストした場合に、列値がデフォルトの列順でペーストされていましたが、変更後の列順に値がペーストされるようになりました。
- (b) ツールメニューの「リスト表示」のコンポーネント（データセット、管理単位など）一覧表示画面に、「リポジトリ最終更新日」、「リポジトリ最終更新ユーザ」、「バージョン」が追加されました。ORMS からチェックアウトした時点のリポジトリ情報が表示されます。チェックアウト後にリリースして ORMS と連携していない場合、この情報は表示されなくなります。
- (c) プロジェクトメニューのデータソース情報オプションを複数回選択すると、複数のウィンドウが開いていましたが、一つのダイアログだけが表示されるように変更されました。
- (d) ヘルプメニューのヘルプコンテンツオプションを複数回選択すると、複数のウィンドウが開いていましたが、一つのウィンドウだけが表示されるようになりました。

⑰ 情報タブの改定

- (a) 「参照」タブでは、複数行を選択してクリップボードへのコピーを行うことができるようになりました。
- (b) 「問題点」タブの「全消去」アイコンをクリックすると、メッセージの消去と同時

に、フォルダ・ツリーのエラー/ワーニングアイコンも消去されるようになりました。

- (c) 「変更点」タブでは、「詳細」ウィンドウを複数回選択しても、一つのウィンドウだけが表示されるようになりました。
- (d) 「変更点」タブのビューアに標準のソート・フィルタオプションが追加されました。また、「詳細」ダイアログ表示中にビューアの異なる行を選択すると、選択行の情報がダイアログに表示されるようになりました。
- (e) 「情報」タブに、「リポジトリ最終更新日」、「リポジトリ最終更新ユーザ」、「バージョン」の表示欄が追加されました。ORMS からチェックアウトした時点のリポジトリ情報が表示されます。チェックアウト後にリリースして ORMS と連携していない場合、この情報は表示されなくなります。

(2) 改定の影響範囲

本改定は、ODIP アドミニストレータの画面表示、操作などの GUI が変更されました。本改定によって、既存の定義、処理実行時の運用・処理結果、及び処理実行時の性能に影響を及ぼすものではありません。

4. ODIP プロセスマネージャの操作性改善

(1) 改定内容

- ① ツールメニューの「データセット情報」ダイアログに、次の変更が行われました。
 - ・最大化/最小化のオプションが追加されました。
 - ・前回のウィンドウ位置及びサイズを再現して開くようになりました。
 - ・ダイアログを開いたときに、入出力データセット情報の列幅が自動的に調整されて表示されるようになりました。
- ② ツールメニューの「データソース情報」ウィンドウは、オプションを複数回選択しても、一つのウィンドウだけが表示されるように変更されました。
- ③ ヘルプメニューのヘルプコンテンツ・ウィンドウは、オプションを複数回選択しても、一つのウィンドウだけが表示されるように変更されました。

(2) 改定の影響範囲

本改定は、ODIP プロセスマネージャの操作だけに関わるもので、既存の定義に影響を及ぼすものではありません。また、定義の実行結果及び実行時の性能に影響を及ぼすものではありません。

5. ODIP リポジトリマネージャの操作性改善

(1) 改定内容

- ① ファイルメニューの「インポート」ダイアログ下部の「問題点」の表示に次の変更が行われました。
 - ・複数行を選択してクリップボードへのコピーを行うことができるようになりました。
 - ・エラー/警告の表示列に、アイコンに加えて「エラー」、「警告」の文字列が表示されるようになりました。
 - ・項目の反映によって問題点の表示が更新されるたびに、列幅が自動調整されるようになりました。
 - ・フォルダ・ツリー表示と問題点との境界に枠線が表示されました。枠線をドラッグして移動することでサイズの変更ができます。
- ② ファイルメニューの「他のリポジトリからインポート」において、「プロジェクト、バージョン選択」オプションダイアログの「参照」ボタンを押して表示されるバージョン選択ダイアログは、ファイルメニューの「エクスポート」で表示される「履歴」ダイアログと同じ画面が表示されるようになりました。
- ③ 「変更内容」の「相違点」表示画面では、「詳細」ウィンドウを複数回選択しても、一つのウィンドウだけが表示されるように変更されました。
- ④ ヘルプメニューのヘルプコンテンツ・ウィンドウは、オプションを複数回選択しても、一つのウィンドウだけが表示されるように変更されました。

(2) 改定の影響範囲

本改定は、ODIP リポジトリマネージャの操作だけに関わるもので、既存の定義に影響を及ぼすものではありません。また、定義の実行結果及び実行時の性能に影響を及ぼすものではありません。

6. ODIP オペレーションマネージャの操作性改善

(1) 改定内容

ヘルプメニューのヘルプコンテンツ・ウィンドウは、オプションを複数回選択しても、一つのウィンドウだけが表示されるように変更されました。

(2) 改定の影響範囲

本改定は、ODIP オペレーションマネージャの操作だけに関わるもので、既存の定義に影響を及ぼすものではありません。

響を及ぼすものではありません。また、定義の実行結果及び実行時の性能に影響を及ぼすものではありません。

7. ODIP トランスフォーマの改定

(1) 改定内容

ODIP トランスフォーマの処理において、異なるデータベース上にあるテーブル間の結合は、エラーとなり、処理は異常終了するように改定されました。

異なるデータベース上のテーブルは、データ入力時に発行する SQL 文では結合の操作ができません。以前のバージョンの ODIP トランスフォーマは、各テーブルへの問合せを行う SQL 文を発行し、結果行を順次処理して結合と同様の処理を行っていましたが、同じデータベース上のテーブルを SQL 文で結合する場合と処理結果が異なる場合があるため、SQL 文によってテーブルの結合を行う方式に統一されました。

尚、同じデータベース上の異なるスキーマのテーブル同士の結合のように、SQL 文による結合が可能であれば、従来どおり処理されます。

(2) 改定の影響範囲

一つの入力データ定義で結合されるテーブルに各々異なるデータソースが指定され、そのデータソースの DBMS、ホスト名、データベース名のいずれかが異なる場合、本改定の導入によって、当該処理はエラーになります。これに該当するバッチ処理を既に運用されている場合は、結合対象となるテーブルを同一のデータベースに配置する、データベースリンクなど RDBMS の機能を使用してテーブルの結合を可能にする、などの対策をご検討ください。

8. 不具合の修正

(1) ODIP アドミニストレータ

- ① 導出演算、抽出条件の計算式、条件式のダイアログで Ctrl+U(入力属性選択)を押すと、エディタ画面の最大化アクションが同時に起動する問題が修正されました。
- ② 入力時導出演算の導出演算タブにて、ツールバーまたはコンテキストメニューの「編集」ボタンを押下しても編集ダイアログが表示されない問題が修正されました。
- ③ 導出演算の初期値に設定された選択属性が削除されると、定義の検査・トランスフォーマ・リポジトリの作成で NULL 例外が発生する場合がある問題が修正されました。
- ④ 時系列演算を含む管理単位をコピー&ペーストすると、NULL 例外が発生する場合がある問題が修正されました。

- ⑤ 明細ユーザビューにおいて、出力属性を、同じデフォルトカラム名をもつ他の属性に変更すると、「ユーザビューにあわせてデータセットを更新」したときに、出力データセットのカラム名に、属性のデフォルトカラム名ではなく、“FLD001”のように自動生成されたカラム名が設定される問題が修正されました。
 - ⑥ 管理単位実行時のパラメータ設定ダイアログで「パラメータファイル・パス」で指定したパラメータファイルの「KEY = VALUE」の設定において、VALUE にスペースで始まる文字列（例えば、「 ABC」）を指定することができませんでした。パラメータ設定ダイアログで「パラメータ」では、文字列をダブルクォテーションで囲う（例えば、「" ABC"」）とスペースで始まる文字列を渡すことができますが、パラメータファイルでは、VALUE のダブルクォテーションは一つの文字と解釈され、ダブルクォテーションを含む文字列が返されました。本パッチでは、パラメータファイルとパラメータ文字列とで VALUE の指定方法が同じになるように修正されました。パラメータファイル内においても、例えば、KEY = “ ABC” のように、値をダブルクォテーションで囲むことで、スペースで始まる文字列を渡すことができます。
 - ⑦ 導出演算の計算式に#MOVE, #REPLACE などの関数が使用されている場合、編集ダイアログを開くと、これらの関数の引数に指定された属性が、導出項目として表示される問題が修正されました。
 - ⑧ プロジェクトのエクスポート後に保存したプロジェクトファイルを開くと、導出演算（開始）、導出演算（終了）で使用している属性が見つからず、エラーとなる場合がある問題が修正されました。
- (2) ODIP オペレーションマネージャ
- ① ファイルメニューの「データソース情報」において、データソース情報の編集ダイアログで「テスト」ボタンを押したときに、“インタラクティブモード”で接続の試行が行われていましたが、“トランスフォーマサーバモード”で接続の試行を行うように修正されました。
- (3) ODIP トランスフォーマ
- ① 導出演算の初期化処理で定義された#COUNT、#MAX、#MIN、#AVG の関数実行時に、startjob コマンドの“-inp” オプションによるテーブル/ファイル名の変更が反映されず、定義上のテーブル/ファイル名を用いて件数の集約が行われていました。変更後のテーブル/ファイル名を用いるように修正されました。
 - ② 導出演算の初期化処理で定義された#COUNT 関数の実行時に、データソースが固定長ファイルでかつ対象となるファイルが存在しない場合には、処理が異常終了するように

変更されました。

- ③ startjob コマンドの-paramfile (-pf) オプションのパラメタファイルの「KEY = VALUE」の設定において、VALUE にスペースで始まる文字列（例えば、「 ABC」）を指定することができませんでした。-param (-pa) オプションのパラメタ文字列では、文字列をダブルクォテーションで囲う（例えば、「" ABC"」）とスペースで始まる文字列を渡すことができますが、パラメタファイルでは、ダブルクォテーションは一つの文字と解釈され、ダブルクォテーションを含む文字列が返されました。本パッチでは、パラメタファイルとパラメタ文字列とで VALUE の指定方法が同じになるように修正されました。パラメタファイル内においても、例えば、KEY = " ABC"のように、値をダブルクォテーションで囲むことで、スペースで始まる文字列を渡すことができます。
- ④ 次の条件に一致するとき、計算式の実行順序が意図した結果と異なる場合がある問題が修正されました。
 - (a) 「導出演算」で集約単位を指定して属性を導出している
 - (b) (a)で導出した属性を「終了処理」の条件式・計算式で使用している
 - (c) (b)で導出した属性と同じ属性を「導出演算」の導出項目に指定している
 - (d) (b)で導出した属性を集約単位なしの「導出演算」の条件式・計算式で使用している
- ⑤ 入力データにコード変換（連結、分離、レンジ変換、カテゴリ変換）定義がある場合に、導出演算（終了）で定義された導出演算が実行されない問題が修正されました。
- ⑥ repedit コマンドの-sp|-separator オプションの選択肢に、N(None)が追加されました。CSV ファイルのデータソース定義画面において、セパレータの選択肢として、“カンマ”、“タブ”に加えて“なし（フラットファイル）”が追加されましたが、repedit コマンドには“なし（フラットファイル）”に対応するオプションがありませんでした。

B. 旧バージョンからのバージョンアップ

既にインストールされている ODIP v3.2.8 以降の製品をバージョンアップするには、次の「1 バージョンアップ手順 (3.2.8 以降)」の手順を実行してください。ODIP v3.2.8 より前のバージョンをお使いの場合、各製品ともアンインストールの後、v3.4 のインストールを行ってください。

1. バージョンアップ手順 (3.2.8 以降)

(1) トランスフォーマ・リポジトリのバックアップ

旧バージョンで次のコマンドを実行し、トランスフォーマ・リポジトリのバックアップを保存してください。〈ディレクトリパス〉に指定したディレクトリに複数のファイルが作成されます。

```
$ repexp.sh -rn <リポジトリ名> -dir <ディレクトリパス>
```

※ <リポジトリ名>は repreg.sh -show で表示される Name

(2) 旧バージョンのライブラリファイルのバックアップ

各製品の lib フォルダの odp*.jar (ファイル名が odp で始まり拡張子が jar) を、別フォルダへコピーしてください。本手順のバージョンアップでは、lib¥*odp*.jar のみ更新されます。

(3) ライブラリファイルの更新

インストール DVD の ODIP34_201811 フォルダに、各製品のプログラムファイル対応したライブラリ (ファイル名 odp*.jar) が含まれます。ODIP が起動していたら停止し、次表のとおり、ODIP 各製品の lib フォルダに上書きコピーしてください。

表 3 インストール DVD に含まれる各製品のファイルのコピー先

フォルダ		ファイルのコピー先	
ODIP34_201811	lib	ADM	ODIP アドミニストレータの lib フォルダ (15 ファイル)
		OPE	ODIP オペレーションマネージャの lib フォルダ (8 ファイル)
		RPM	ODIP リポジトリマネージャの lib フォルダ (12 ファイル)
		RPS	ODIP リポジトリサーバの lib フォルダ (7 ファイル)
		TFM	ODIP トランスフォーマの lib フォルダ (9 ファイル)

ファイル更新後は、製品のバージョンが 3.4、ライブラリのビルド ID が 1030400003700 になります。各製品のバージョン、ビルド ID は、製品を起動して、表 4 のメニュー、コマンドで確認してください。

表 4 各製品のバージョン・ビルド ID の確認方法

製品名	確認方法
ODIP アドミニストレータ	ヘルプメニュー > “ODIP について”
ODIP オペレーションマネージャ	ヘルプメニュー > “ODIP について”
ODIP リポジトリマネージャ ODIP プロセスマネージャ	ヘルプメニュー > “ODIP について”
ODIP リポジトリサーバ	ODIP リポジトリマネージャの ツールメニュー > “ORMS サーバ情報”
ODIP トランスフォーマ	“showserver.sh -i v” を実行

(4) トランスフォーマ・リポジトリの変換

本バージョンでは、トランスフォーマ・リポジトリのテーブル定義が変更されました。そのため、テスト/本番で既にお使いのトランスフォーマ・リポジトリがある場合、次のコマンドでトランスフォーマ・リポジトリを最新のレイアウトに変換してください。

```
$ repconv.sh -rn <リポジトリ名>
```

※ <リポジトリ名>は repreg.sh -show で表示される Name

(5) トランスフォーマ・リポジトリの生成

変換したトランスフォーマ・リポジトリに対して、ODIP プロセスマネージャからトランスフォーマ・リポジトリの作成を行なってください。

2. 旧バージョンへ戻す方法

何らかの理由で、元のバージョンへ戻す必要がある場合、次の手順を実行してください。

(1) トランスフォーマ・リポジトリの削除

repremove コマンドを実行して、v3.4 で追加されたテーブルを含めて、トランスフォーマ・リポジトリを削除してください。

```
$ repremove.sh -rn <リポジトリ名>
```

(2) バックアップしていたライブラリファイルの戻し

「B.1(2) 旧バージョンのライブラリファイルのバックアップ」でバックアップしたファイルを、元の lib フォルダに上書きコピーで戻してください。コピー後に製品を起動し、「B.1(3) ライブラリファイルの更新」の方法でバージョン、ビルド ID を確認し、バージョン 3.4、ビルド ID : 1030400003700 ではないことを確認してください。

(3) トランスフォーマ・リポジトリの戻し

repimp コマンドを-ra オプション付きで実行します。〈ディレクトリパス〉は「B.1(1) トランスフォーマ・リポジトリのバックアップ」でバックアップしたパスを指定してください。

```
$ repimp.sh -rn <リポジトリ名> -dir <ディレクトリパス> -ra
```

3. 変換が行われていないトランスフォーマ・リポジトリの上書き

「B.1(4) トランスフォーマ・リポジトリの変換」が行われていないトランスフォーマ・リポジトリに対して、ODIP プロセスマネージャで「トランスフォーマ・リポジトリの生成」、または ODIP アドミニストレータで「実行」を行うと、図 15 の「PRCFLOWTBL.PRCFLOWNO の値が大きすぎます」のようなエラーが発生します。(メッセージはお使いのデータベース製品によって異なります)

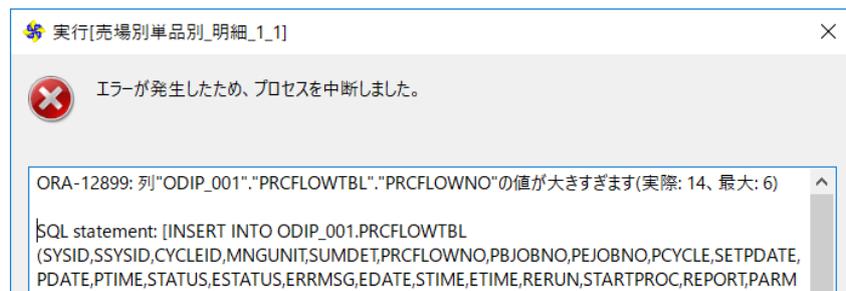


図 15 エラー発生時のメッセージ表示例

repconv.sh による変換を行うか、ODIP プロセスマネージャで「トランスフォーマ・リポジトリを初期化する」オプションにチェックを付けて「トランスフォーマ・リポジトリ生成」を行う (図 16)、もしくは ODIP アドミニストレータで「トランスフォーマ・リポジトリの全消去・再作成と時系列中間テーブルの削除・再作成を行なう」にチェックを付けて「実行」(図 17) してください。

図 16 ODIP プロセスマネージャのトランスフォーマ・リポジトリ作成画面

図 17 ODIP アドミニストレータの実行画面

以上